

恋する賢治

— 受容史の中の宮沢賢治 —

牧野 静

青い抱擁衝動や

明るい雨の中のみたされない唇が

きれいにそらに溶けてゆく

— 「第四梯形」 「二・二〇五」

はじめに

宮沢賢治（一八九六—一九三三）⁽¹⁾。生涯から百二十年以上を経てなお、多くの人々に愛され続ける詩人、童話作家である。賢治そのものが、求められている。そう表現するしかないほど、その生涯は繰り返し物語化され、語られ続けてきた。例えば一九九六年には賢治生誕百年を記念して、NHKドラマ化、東映、松竹での映画化⁽²⁾などが行われた。描き出される賢治の姿には共通項がある。裕福な家庭の長子として生まれつつ、青年期に宗教的な使命感に目覚め、貧しい農民たちのために尽力しようとする。

挫折と失敗に満ちた賢治の生涯は、病ゆえに若くして閉じられる。しかし遺された賢治のテキストは、今でも我々の胸を打つ——。賢治が抱いた理想、賢治の自己犠牲的な精神を物語として受容していく課程は、ほとんど神話化と呼べるほどのものである。

近年、特に二〇一〇年代以降、このような宮沢賢治の受容の状況に変化が起きている。賢治の生涯を描く際、依然として賢治の生涯から自己犠牲と献身が削り取られることはない。しかし賢治の理想と密接であった宗教的な使命感は、削ぎ落されることがある。詳しくはのちに述べるが、賢治の生涯における宗教的要素が注意深く排除されていく事例が見受けられるのである⁽³⁾。そしてもうひとつ、大きな特徴がある。それは〈恋する賢治〉⁽⁴⁾とでも呼べそうな姿が注目され、主題化される傾向である。

本稿の冒頭に引いたのは、『春と修羅』第一集に収録されている「第四梯形」の一部である。ここで賢治は具体的な身体性を伴うような仕方では、おそらくは強く恋い慕う相手との触れ合いを望

み、かつそのような触れ合いの欲求が「みたされない」ことを受け入れていく心の動きを「そらに溶けていく」と表現している。生涯独身を貫き、他者に献身的であった賢治像、聖化された賢治像からは連想しにくいのが、身体的に他者と触れ合いたいという欲求を持つ〈恋する賢治〉もまた、賢治の多面性の一側面である。本稿では〈恋する賢治〉の表象を、いくつかの映像作品や楽曲に注目して取り上げ、〈恋する賢治〉がいかに描き出されてきたかを確認する。その際、受容史と研究史との関係も取り上げ、そこにある読み手の欲望を考察していく。

一、幻の恋人探し

〈恋する賢治〉は一体、誰に恋をしていたのか。賢治が結婚を思い詰めるほどの初恋の相手は、一体誰だったのか。「第四梯形」で賢治が抱擁を願った相手は、一体誰だったのか。賢治研究には〈幻の恋人探し〉と呼べそうな一ジャンルが存在する。〈幻の恋人探し〉は、〈恋する賢治〉の足跡をたどり、その恋の相手を知ろうとするものである。

賢治の初恋の相手の特定は、〈幻の恋人探し〉の中でも一定の成果を上げたジャンルである。これは賢治が一九一四年四月、肥厚性鼻炎の治療のために入院した際、看護婦（執筆者注、当時の呼称に従った）に片思いし、結婚しようと思いつめた、その相手

の特定を目指すものである⁽⁴⁾。この時賢治は以下のような短歌を詠んでいる。

十秒の碧きひかりは

去りたれば

かなしくわれは

又窓に向く

「一・一九」

これは賢治が検温時の僅かな間のみ想い人と接点を持てる切なさを綴ったものである。ちなみにこの時賢治は思い詰めて父政次郎（一八七四—一九五七）に結婚の意思を伝えるも、まだ若すぎること理由に反対され、断念している。この相手が誰であったかについては既に定説がある⁽⁵⁾。

初恋以外にも、賢治が誰か特定の相手を想っていたことが推測できる時期は、その生涯に何度か存在する⁽⁶⁾。その中でも最も多く論じられ、かつ先行論によって立場が分かれるのが、『春と修羅』第一集に綴られた時期——すなわち賢治が農学校教師としての充実した日々を送りつつ、死にゆく妹トシ（一八九八—一九二二）を見つめ、またその死を乗り越えようとしていく時期——の相手である。

冒頭で紹介した「第四梯形」以外にも、『春と修羅』第一集中

には賢治が恋愛感情について記した作品が複数収録されている。例えば「恋と病熱」では

けふはぼくのたましひは疾み
鳥さへ正視ができない

あいつはちやうどいまごろから

つめたい青銅の病室で

透明薔薇の火に燃される

ほんたうに、けれども妹よ

けふはぼくもあんまりひどいから

やなぎの花もとらない

〔二・二二〕

と綴っており、自身の魂が恋によって「疾み」つつあることを自覚すると同時に、病熱に苦しむトシの姿を思い浮かべている。また「松の針」においては、

おまへがあんなにねつに燃され

あせやいたみでもだえてゐるとき

わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり

ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた

〔二・一四一〕

と綴っており、やはりトシの容態が悪化し、いよいよ看取らねばならぬ瞬間が迫る日付であつてさえ——「松の針」はトシ臨終の日付を付されている——、賢治が「ほかのひと」を想っていたことを記録している。

「ほかのひと」とは誰か。近年受容史の中心に位置するのは、大畠ヤス（一九〇〇—一九二七）という女性がその相手であつたとするものである。

花巻小学校の教師だつたヤスは、賢治が企画・主宰したレコード鑑賞会に参加するうちに、賢治と惹かれ合うようになる。婚前の若い男女、まして教師同士の逢瀬など到底許されない時代に、密かに愛を育んだ二人。その関係は賢治の父政次郎の知るところとなり、宮沢家は大畠家に結婚を申し込む。しかし大畠家は縁談を断る。トシを亡くしたばかりの宮沢家に結核を発症した自分が嫁ぐわけにはいかないと、ヤスは苦悩していた。また他に縁談のあつた医師に嫁いだがヤスの命を守ることにすると、大畠家は判断したのである。その後失意のまま年齢の離れた医師と結婚しアメリカに渡つたヤスは、渡米からわずか三年後に命を落とす。ヤスが渡米した翌年、『春と修羅』が出版された——けつしてその名を明かすことの出来ない恋人が、かつて確かに存在したしるしとして。ヤスが賢治の相手だつたとする場合、描き出されるストーリーはこのようなものである。

ヤスを巡る物語は非常にロマンチックであるが、信憑性には問題がある⁽⁸⁾。例えばヤスの結婚相手として名が挙げられている「医師・及川修一」は実在しない。修一はヤスがアメリカで生んだ息子の名であり、この「及川修一」はわずか二歳で病没している。ヤスの結婚相手であり、共にアメリカに渡った及川末太郎（一八八一—？）はアメリカで宿泊業を営んでいたことが分かっている。アメリカで及川家のホームドクターであった医師の名はYuuka Oyamaと記録されており、ヤスの夫ではない。またヤスの実際の死因も結核ではなく心筋梗塞である。それでも、ヤスを巡る物語は近年の受容史の中心にある。賢治とヤスとの悲恋は漫画化され、さらにはドラマ化され、近年ほとんど定説と看做されているため、のちの章でもう一度扱う。

別の説もある。それは、賢治の想い人は保阪嘉内（一八九六一—一九三七）であったとするもの⁽⁹⁾である。保阪は盛岡高等農林学校時代の学友であり、賢治とは同寮の同室であった。共に農村改革の理想を語り、共に岩手山に上り、共に同人誌『アザリア』を立ち上げた相手が、保阪である。保阪と賢治は紙面上で岩手山登山を詠んだ短歌を交わす。保阪も賢治に対し、「友よ、まことの恋人よ」と呼びかけるような短文を『アザリア』に発表している。保阪は、ある詩を発表したことにより危険思想の持主と看做され、退学処分を受けてしまう。賢治は処分撤回のために奔走する。処分が覆らなかつたのちも、賢治は保阪に書簡を送り続ける。その

後も賢治は、保阪を激励する。「しつかりやりませう」「十五・一八七」と二十回繰り返し書きつけ、保阪へと投函する賢治。「私が友保阪嘉内、私が友保阪嘉内、我を棄てるな」「十五・一九七」と懇願する賢治。しかし賢治の願いは実らなかった。保阪の国柱会入会はかなわなかった。賢治と保阪は一度だけ東京で再会することが出来たが、その後賢治が保阪に書簡を送る頻度は激減した。それでも、賢治が保阪に宛てた七十三通の書簡は、保阪によって終生保管され、のちに出版されることとなる。ちなみにこの七十三という数は、賢治が生涯に綴った書簡のうち、父親宛、東北砕石工場技師時代の仕事関連の事務連絡に次ぎ、三番目に多いものとなる。

賢治が保阪に対して抱いていた感情の種類の特定には一定の困難がある⁽¹⁰⁾が、少なくとも保阪が賢治にとって激しい思い入れの対象であったことは疑いえない。本稿は賢治のセクシヤリテイの特定を目的としないが、特定のセクシヤリテイであった可能性を排除することも志向しない。

それ以外にも『春と修羅』第一集における賢治の想い人を探ろうとする研究はある⁽¹¹⁾。しかし本稿では近年映像化されたこの二説の紹介にとどめたい。大島ヤス説、保阪嘉内説、この二説はともに二〇一〇年代後半に映像化されているのである。次章ではそれを扱う。

二、映像の中の賢治

―ヤス、または嘉内―

言うまでもないことだが、宮沢賢治本人は一九三三年に既に亡くなっている。では、現代に生きる我々ほどのようにして賢治に出会うことが可能だろうか。賢治の熱心なファン以外はさほど気にも止めていないだろうが、実はありとあらゆるメディアに賢治は存在している。国語の教科書には賢治の作品が、倫理の教科書には賢治の人物像が掲載されている。教育の場以外にも、舞台、映画、ドラマ、アニメ、ゲーム、漫画、小説、ライトノベル、JPOP等の楽曲、なんらかのコンセプトを持つアートなど、賢治にインスパイアされた創作物は多岐に渡るジャンルに溢れかえっている。たまたまテレビをつけたら、宮沢賢治を特集する番組が放映されていた。そのような出会いもあるだろう。そしてその出会い方によって、賢治のイメージはさまざまに揺れ動くだろう。この章では賢治の想いがヤスであったとする説、保阪であったとする説、それぞれに準拠する近年の二つの映像作品を紹介する。

魚乃目三太『宮沢賢治の食卓』（少年画報社、二〇一七年）（以降『食卓』と表記）は農学校教師時代の賢治を描いた漫画作品である。この作品は澤口説を踏襲しており、ヤスと賢治の束の間の秘められた愛とその悲劇的な結末が、ごく切ない小編として挿入

されている。これを元に映像化されたWOWOWドラマ版『宮沢賢治の食卓』（二〇一七年）は更に大胆な脚色を行っている。賢治とヤスの逢瀬の場面は漫画版『食卓』に準拠しており、賢治は束の間の燃え上がる恋に身を委ねるように見受けられる。問題はその後の展開の、死にゆくトシを不憫に思うあまり、賢治がヤスとの別れを一方的に決意するという点である。ドラマ版の賢治は自筆原稿を焼き捨てようとしてトシに怒鳴りつけられるなど、史実にも漫画版『食卓』にもない極端な行動を度々とっているが、恋愛を巡る行動においても、思い詰めやすく極端な選択に走りがちな性格の持ち主として描写されているといえる。

もう少し詳しくみていこう。漫画版『食卓』からは、賢治を巡る宗教的要素が注意深く排除されている。漫画版『食卓』は、そのタイトルの通り賢治をめぐる食にまつわるエピソードを扱う。それは例えば、貧しさゆえに農学校を退学して働きに出る教え子にかしわ南蛮そばを御馳走したことや、トシが末期に雪を食べたがったこと、教え子が嘔吐する姿から、細かく刻んだ大根を混ぜてかきまじした大根めしを食べている貧しい農家の厳しい状況に気付くエピソードなど、実際の出来事として確認されているエピソードが元となっている。このように、扱われるエピソードについては、ある程度丁寧な考証が行われている。

ただし、この作品は賢治の菜食を扱わない。食をテーマとしつつ、賢治が仏教の信仰を理由に菜食を行っていた時期は、そもそ

も作品で扱っていない。この作品が扱うのは農学校教師時代のみであるため、賢治がそれ以前の東京時代やそれ以降の農学校教師を辞してのちの独居自炊時代に菜食を行ったことに言及しなくとも確かに問題はないのだが、食以外にも気になる点はある。例えばトシの死をめぐる賢治の葛藤に、仏教的な要素は見当たらない。臨終のトシの枕元で賢治が題目を叫んだことや、トシを茶毘に付す際に賢治がひとり唱題を行ったこと、その後のトシの転生先を迫り求める創作において仏教用語を鏤めたことは、漫画版『食卓』においては紹介されない。

漫画版『食卓』が賢治の帰郷から始まるのに対し、ドラマ版『食卓』は賢治の東京時代から始まる。史実を確認しておこう。そもそも賢治が家出して東京に向かったのは鶯谷の国柱会館を目指し、そこで住み込みで働こうとしたためである。つまり、宗教的動機なしには賢治の東京行きは起こりえない。住み込みを断られてからも、東京での賢治は街頭でのビラ配りを行うなど、積極的に布教活動に従事している。そしてこのドラマにおいて、そのような描写は一切ない。

ドラマ版『食卓』ではその後、花巻に帰郷した賢治が近隣の貧しい農民の姿に心を痛め、利益を度外視した質屋の営業を行うおうとしたりする。しかしそれは賢治が世間知らずで損得勘定が出来ないことに加え、底抜けに優しい心を持つているためである。東京へ行った動機からも、農民のために尽くそうとする動機からも、

宗教的な要素は取り除かれている。当然、恋愛を巡る葛藤からも、宗教的な要素は排除されている。そしてただトシの病のみがクロージアップされるのである。

『食卓』と対照的なのは、NHK教育テレビジョンにて放映された『E.T.V特集「宮沢賢治 銀河への旅―慟哭の愛と祈り―』(二〇一九年二月九日)(以下『慟哭』と表記)である。これは賢治が盛岡高等農林学校時代の友人である保阪嘉内(一八九六一九三七)を愛し、それゆえに苦悩していたという前提で構成されたドキュメンタリードラマ番組である。この番組はおそらくは前章で挙げた保阪嘉内を賢治が想いを捧げた相手であるという説を根拠に構成されており、その解釈のもと、少年期から青年期の賢治と保阪の姿を映像化すると同時に、賢治の作品上の保阪からの影響を読み解いていく。

盛岡高等農林学校に進学した賢治が島地大等『漢和対照妙法蓮華経』を手にとる場面から、番組は始まる。その後賢治は後輩として入学してきた保阪と出会い、意気投合する。農村改革の理想を語る保阪。交流を深めていく賢治と保阪。しかし保阪は退学処分を受けてしまう。その後、二人の人生が再び交わることはなかった。しかし保阪と共に語り合った夢、保阪と共に眺めた銀河が、賢治を創作に掻き立てていく。

賢治と保阪の交流について史実をなぞりながら進行していく番組のクライマックスは、賢治の保阪への思いが『銀河鉄道の夜』

を生み出したと語られる場面である。嘉内は郷里の山梨でハレー彗星を観察した際の一九一〇年のスケッチと、「銀漢ヲ行ク彗星ハノ夜行列車ノ様ニニテノ遙カ虚空ニ消エニケリ」というメモ書きを賢治に見せたことがある。賢治と保阪は二人きりで岩手山登山をし、天の河を眺めながら互いの夢を語り合った。その記憶が保阪と決別してのちの賢治に『銀河鉄道の夜』を描かせたのだと、番組では解説される。

この番組において、山梨県立文学館に保存されている保阪宛書簡の実物が映し出される場面では、はつきりと「国柱会」の文字が読み取れる箇所がクローズアップされる。賢治と保阪の交流において、賢治が自身の宗教的理想を保阪に共に抱いてほしいと懇願したことは、ごく正面から取り扱われている。

『慟哭』において、印象的なナレーションがある。「釈迦は言う。「中略」たとえそれが同性を恋うようなものであってもそれは宇宙の一部であり自然の一部である。即ちすべてが私の子なのだ」。その際映し出されるのは賢治が盛岡中学時代に下宿していた清養院の釈迦仏である。この演出からは、この番組の制作者が同性を愛したことに苦悩した賢治が仏教に救いを求めたと解釈していることがうかがえる。

二〇一〇年代に映像化された青年期の賢治像は、非常に対照的である。異性愛者である賢治はもはや宗教的な救いを求めず、他者とのつながりのなかで葛藤し続ける。同性愛者である賢治は、

最も愛しい他者とのつながりを求めることに苦悩し、超越的な存在に宗教的な救いを求める。このような表象のされ方は、同じコインの両面であるということもできるだろう。

ここで、一九九六年の生誕百年記念実写作品群がどのように賢治を扱っていたかも確認しておきたい。まずこれらの作品群は、賢治の仏教の信仰に必ず言及している。東映製作の『わが心の銀河鉄道 宮沢賢治物語』（以降『わが心』と表記）、松竹制作の『宮澤賢治 その愛』（以降『その愛』と表記）、NHK制作の『宮澤賢治 銀河の旅びと』（以降『旅びと』と表記）、そのすべてが法華信仰に目覚めた賢治が花巻の街をひとり団扇太鼓を叩きつつ唱題し練り歩く姿、家出して東京で国柱会館を訪ねる姿を映像化している。仏教の信仰は、賢治の純粹さやひたむきさ、ある種の狂気、行動原理を説明するために、必ず取り上げられているのである。

生誕百年の賢治が〈恋する賢治〉であったかも確認しておきたい。結論からいえば、賢治はむしろ性愛を拒もうとした人物として描写されている。そもそも生誕百年時の作品群は『春と修羅』の時期の賢治の隠された恋を描こうとはしない。『旅びと』の賢治は一切恋心が描写されない（なお保阪との交流と決別には幾らかまとまった描写がなされ、保阪が故郷山梨で妻子を持ったこと、農村改革を目指しつつ四十歳の若さで病没したことも紹介する）。『その愛』の賢治は、看護婦への初恋と、農学校教師を辞しての

ちに知人の妹と見合いの意図で顔合わせをしていたことが描写されるが、どちらもごく淡い一瞬の邂逅である。

『わが心』と『その愛』の両作品に共通するのは、農学校教師を辞した賢治が羅須地人協会としての活動を行っていた頃、ある女性に激しく求愛され、また激しく拒絶したエピソードである。この女性のモデルとなった人物は実在している。羅須地人協会を訪ねてきた、賢治のことを非常に強く尊敬していたとされる人物である⁽¹²⁾。この女性に対する賢治の態度は、居留守を使う、顔を合わせる際に自身の顔に文字通り泥を塗りたくる、自身が「レプラ」、つまりらい病であると嘘をつくなどであったとされる。つまり、ある女性を賢治が拒んだというエピソードは、ある程度は伝記的事実に即した描写である。

生誕百年の賢治像は、〈恋する賢治〉ではなくむしろ〈恋を拒む賢治〉である。そしてそれは宗教者である賢治像と同時に提示される。宗教的な理想を抱いており、病身をおして理想に向かうとし、それゆえに恋を拒む姿が、そこにはある。

この章ではいくつかの賢治の生涯にまつわる映像作品を確認してきた。その生涯が幾度も映像化される中で、不器用に激しく恋する賢治も、不器用に激しく恋を拒もうとする賢治も、宗教の要素を感じさせない賢治も、宗教的理想を抱く賢治も、宗教に個人的な救いを求める賢治も、提示されてきたことがわかる。

見過ごすことが出来ないのは、広く人口に膾炙する作家の人物

像は、既に実在の作家から何段階もの受け手を経て変容し続けてきたものであるという点である。生誕百年時の東映や松竹の映画を見た人々にとって、賢治は不器用な理想に燃える青年であり、個人的な恋愛よりも農村改革に向けて尽力することを優先した人物である。自己犠牲的で献身的な賢治像は、このような作品を通じて形成されてきたといえる。

時を経て、〈恋を拒む賢治〉のカウンターのように〈恋する賢治〉が描かれた『食卓』が登場した。宗教的要素がすべて排された点も、生誕百年の賢治とは対照的である。もはや宗教的葛藤を抱かない『食卓』の賢治は、死にゆく妹を想うあまり一方的に恋人との別れを決意する、やや奇矯な人物である。また叶うことのない想いに苦しむ『慟哭』の賢治とも、宗教と恋愛を引き合わせて悩む点が部分的に似通うようである。かなり異なるものである賢治自身の救われたさをクローズアップする点に、『慟哭』の新規性がある。

『慟哭』が放映されたのち、賢治が同性愛者であったことに衝撃を受けた、納得したと綴るSNS上の書き込みが複数観測されるようになった。『慟哭』を視聴し納得した人々にとって、賢治は同性の学友を愛して苦悩し、宗教的な救済を求め、そして報われぬ思いを創作に昇華していった人物なのである。ただし同時に『慟哭』のストーリーに激しく反発し、賢治をシスヘテロであると断じる、おそらくは賢治の熱烈なファンによる書き込みも観

測される。

かつて『春と修羅』第一集の「序」において「わたくしといふ現象」と綴った賢治も、まさか自身がその生涯ごと「現象」としか呼びえないような仕方でも種多様に受容され続けるとは夢にも思わなかっただろう。次章では多岐に渡る受容のうち、二〇一〇年代のJ・POPにおける賢治にインスパイアされた表象を確認したい。

三、「恋と病熱」

―米津玄師における宮沢賢治―

受容史の中の賢治は、あるときは〈恋する賢治〉であり、あるときは〈恋を拒む賢治〉である。そのどちらにも、先の章でいくらか言及したように、賢治自身のテキストから、また調べ尽くされた賢治の生涯の伝記的事実から導き出すことが出来る。

この章では賢治の生涯そのものではなく、音楽の中に存在する〈恋する賢治〉のエッセンスを扱うことで、受容史を担う人々が賢治に向ける欲望を探る。具体的には若者を中心に絶大な人気を誇るシンガーソングライター米津玄師（一九九一―）が二〇一四年に発表した「恋と病熱」に注目する。

「恋と病熱」の歌詞は、歌う主体が一人で過去の愛を反芻しているものである。また「似ている二人をあなたはこうする？」、

「赦しを乞う」、「愛していたいこと／愛されたいこと／望んで生きること／許してほしい」等の歌詞からは、「二人」が問題となること、歌う主体には罪の意識があり、赦し／許しを乞うていることが分かる。これは宮沢賢治の「恋と病熱」の構造、病に苦しむトシと「ほかのひと」の二者を賢治がひとり思い浮かべていたことをある程度受け継いだものであるように見受けられる。

米津は@hachi_08というTwitterアカウントを運用しているが、Twitter上で「米津さんは宮沢賢治が好きだと聞きました。恋と病熱のタイトルは宮沢賢治の春と修羅の中に収録されている恋と病熱が関係してたりしますか？」質問された際に以下のように答えている。

引用することで本家を汚してしまうことに罪悪感がありましたが、どうしても使いたかったので頂きました。

— 二〇一四年三月一日、@hachi_08

自身が表現したいと思うものを表すには、どうしても賢治の作品からタイトルを採りたかったのだと米津は言う。その際米津が「本家を汚してしまうことに罪悪感がありました」とはっきりと述べていることは非常に示唆的である。米津が実際に「本家を汚しているのかについては受け手によって評価が分かれるであろうが、重要なのは米津が、賢治に自身の欲望を読み込んでいる

ことを自覚しているという点である。

先の章でも扱ったように、〈恋する賢治〉に限定して受容史の一部を追いかけても、そこには様々な解釈がみられる。例えば賢治の恋の相手が大島ヤスであったという説は漫画化、ドラマ化され、二〇一〇年代の賢治受容の主流に位置する。ここで大島ヤス説を提唱する澤口たまみが、保阪説を唱える先行論に言及し、「タブー」だからという理由で、むやみに否定するつもりはありません。けれどもやはり、不自然なのです」と綴り、また「私たちは今こそ、『中略』女性を愛した賢治のほんとうの姿を、静かに受け止めるべきでしょう」と述べていることを確認したい。これは端的にホモフォビックでヘテロノーマティブな欲望を示すものだろう。この澤口説に準拠して構成される『食卓』における賢治像は、宗教的な葛藤を抱かない、異性ととの恋に悩む等身大の青年である。現代のマジョリテイが共感しやすい姿をとっている賢治こそが受け手に寄り添いうるという欲望が、そこにはある。逆に賢治が何らかマイノリティとして苦悩する姿こそが人々に寄り添いうるもの、人々の欲望に応えうるものであるという立場も存在している。賢治が保阪に対しあまりにも強い思い入れを持っていたことは書簡等に裏付けがあるが、そこから更に踏み込み、賢治がより具体的に保阪を想っていたという物語に胸を打たれる人々も多い。

そしてこの章で扱った「恋と病熱」を発表した米津玄師にとっ

て、賢治は孤独に他者を思いながら赦しを乞うときの象徴である。米津は二〇二〇年八月に「カムパネルラ」という楽曲も発表しているが（ちなみにこの「カムパネルラ」を収録するアルバム『STRAY SHEEP』は「WORLD MUSIC AWARDS」CDアルバムセールス部門にて全世界で首位を記録したことがある）、これは『銀河鉄道の夜』においてカムパネルラを死なせてしまったザネリの視点から歌ったものであり、米津の「自分の性質としての自罰的な部分とリンクした」ものであるという⁽¹³⁾。米津にとつての賢治は愛と赦しを乞うときの象徴である。米津が賢治作品から継承するのは、罪悪感を抱きながらも痛切に呼びかけずにいられない他者を持つという視点であり、それは〈幻の恋人探し〉の研究史とは問題意識を異にする立場でもある。その相手が誰であったかは、最早問題とまらない。

表象される賢治像には受容史を担う人々の欲望が常に反映される。賢治の研究史は、そのとき賢治像を表象しようとする受容史の担い手の欲望によって取捨選択され、反映されていく（あるいはされない）ものだとみることができると。

むすびにかえて

本稿では受容史の中の〈恋する賢治〉の姿を追いかけることで、賢治がその受容史を担う人々から、常に読み手に寄り添うもので

あつてほしいという欲望を向けられ、表象されていることを確認してきた。それはある程度は研究史を反映することもあるが、どちらかといえば受容史を担う人々の欲望を強く反映するものである。またその研究史そのものも、研究者の恣意を離れては成立しえないものでもある。

本稿の最後に、賢治自身が「過去情炎」(『春と修羅』第一集)において自身の恋心をいかに綴ったかを引き、幕としたい。

わたくしは待つてゐたこひびとにあふやうに

応揚にわらつてその木のしたへゆくのだけれども

それはひとつの情炎だ

もう水いろの過去になつてゐる

——「過去情炎」(『二・二二二』)

「第四梯形」で「抱擁衝動」と「みたされない唇」を「きれいに空に溶」かしてしまつた賢治にとって、「待つてゐたこひびと」に会おうとしたことは最早「水いろの過去」である。

その過去は賢治にとって、『春と修羅』第一集における「小岩井農場パート九」の言葉を借りるなら「じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする」願いであつた。そして「たつたもひとつのたましひ」ではなく「万象といつしよに／至上福祉にいたらうとする」

「正しいねがひ」を追い求めるべきであるという結論を出した賢治は、その後も創作を続けていく。「たつたもひとつのたましひ」ではなく「万象」と共にゆこうとする賢治にとって、「こひびと」が誰であつたのかは、最早問題ではなくなる。

ただし賢治の生涯は、その人氣が続く限り、その時々々の受け手の欲望を反映し、切り取られ、解釈され、なんらかのコンテツトへと昇華され続けていくであらう。その際、〈恋する賢治〉として表象されることも、〈恋を拒む賢治〉として表象されることもあるだろう。近年は賢治の表象から宗教的要素は排される傾向もあるが、爆発的な進展を遂げた近代仏教研究においては、宮沢賢治はその登場人物と目されている⁽¹⁴⁾。世相次第ではまた仏教者としての賢治が注目を集めることもあるかも知れない。テキストクリティークの次元をはるかに超え、賢治は拡散され続けていくのである。

註

(1) 本書における宮沢賢治のテキストは、宮沢賢治『**【新】**校本宮澤賢治全集』(筑摩書房、一九九六—二〇〇六年)に拠る。また「巻数・頁数」の順に表記する。

(2) 賢治の生誕一〇〇年を記念して、『ドキュメンタリードラマ 宮沢賢治 銀河の旅びと』(NHK、一九九六年)や『わが心の銀河鉄道 宮沢賢治物語』(東映配給、一九九六年)や、『宮沢賢治

その愛』(松竹配給、一九九六年)など、賢治の生涯、特に青年期を中心に扱う映像作品が製作されている。なおこれ以外にも賢治の生涯を扱う作品に、『イーハトーブ幻想KENJIの春』(テレビ岩手・グループタック、一九九六年)というアニメ映画もあるが、本稿では実写作品に限定して考察した。

(3) 魚乃目三太『宮沢賢治の食卓』(少年画報社、二〇一七年)。

(4) 『新』校本宮沢賢治全集十六卷(下)年譜篇』参照。

(5) この時の看護婦は高橋ミネという女性であったという説が定説化している。高橋ミネ説を提唱した最も古い先行論は川原仁左エ門『宮沢賢治とその周辺』(川原仁左エ門、一九七二年)である。

その後複数の研究者がその説を踏襲しており、例えば吉見正信『宮沢賢治の道程』(八重岳書房、一九八二年)は高橋ミネの遺族から聞き取り調査を行い、裏付けとしている。

(6) 牧野立雄『隠された恋―若き賢治の修羅と愛―』(れんが書房社、一九九〇年)。

(7) 佐藤勝治『宮沢賢治、青春の秘唄『冬のスケッチ』研究(増訂版)』(十字屋書店、一九八四年)、また佐藤説を踏襲した澤口たまみ『宮澤賢治愛のうた』(盛岡出版コミュニティ、二〇一〇年)など。

(8) 澤口たまみ『新版宮澤賢治愛のうた』(夕書房、二〇一八年)はヤスの結婚相手を「東和町(現在の花巻市)土沢地区出身の医師・及川修一」であったとするが、本文中でも述べたように、及川修

一はヤスが渡米後に生んだ息子の名である。ヤスの息子ほか、ヤスの結婚相手、ヤスを治療した医師については、布臺一郎「ある花巻出身者たちの渡米記録について」『花巻市博物館研究紀要』一四、二〇一九年、二七―三三頁を参照。

(9) 菅原千恵子『宮沢賢治の青春―ただ一人の友―保阪嘉内をめぐる』(JICC出版局、一九九四年)。

(10) 賢治が保阪に対して抱いた感情の種類を検証するには、少なくとも日本の近代における恋愛概念の成立史を踏まえた上で、賢治が内面化していた価値観を探らねばならず、稿をあらためる必要がある。そのため本稿では賢治の恋の相手として保阪を想定する先行論があると紹介するにとどめる。なお日本の近代における恋愛概念の成立については、田中亜以子『男たち/女たちの恋愛―近代日本の「自己」とジェンダー』(勁草書房、二〇一九年)を、日本の近代における同性愛概念については、前川直哉『男の絆―明治の学生からボーイズ・ラブまで』(筑摩書房、二〇一一年)を参照した。

(11) 澤村修治『宮澤賢治と幻の恋人 澤田キヌを追って』(河出書房新社、二〇一〇年)など。また栗原敦『資料と研究』ところどころ二三『校本 宮澤賢治全集』で発表出来なかったこと・小沢俊郎さんから伺った話』『賢治研究』一三一、二〇一七年)、二九―三二頁では、宮沢家が結婚を申し込んだ家は一度研究者の聞き取り調査によって特定されていたことが明らかにされる。ただ

し遺族への配慮からその名は公表はされず、また相手を伏せて結婚を申し込んだ事実を全集の年譜に載せることも諸事情で見送られたという経緯が紹介されている。また特定した研究者、特定先を知らされた研究者たちは既に全員鬼籍となっており、結婚を申し込んだ相手が永久の謎として残される可能性も、あわせて指摘されている。

- (12) 上田哲、鈴木守、森義真著『宮沢賢治と高瀬露―露は「聖女」だった』ツーンライフ、2020年。

- (13) 音楽ナタリー「米津玄師「STRAY SHEEP」インタビュー」、<https://natalie.mu/music/pp/yonezुकenshi/6/page/3>、二〇二二年三月一五日閲覧。

- (14) 吉永進一、近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ…仏教からみたもうひとつの近代』(法蔵館、二〇一六年)。

(まぎの・しずか 筑波大学非常勤講師)